

NII 湘南会議から世界への発信

伊藤貴之

お茶の水女子大学

1. NII 湘南会議とは

NII 湘南会議*は、世界トップクラスの研究者を日本に集め、情報学の課題を合宿形式で集中的に議論する研究集会である。神奈川県湘南国際村センターに日曜日夜に集合し、月曜から木曜昼までの3日半にわたって、国際的に有名な20-35人程度の研究者が議論を交わす形式となっている。この形式は情報学の研究者の間で旧来から知られるドイツのダグストゥール会議†と同様の形式である。

会議の開催には、まず最低1名の日本人研究者を含むオーガナイザ陣が特定の研究課題に関する申請書を提出してレビューを受ける。申請書には研究課題のスコップ、想定される招待研究者陣、オーガナイザの経歴や業績などを記載する。レビューの結果として申請書が採択されたら、日程を確定し、各研究者に招待状を発送して一定の参加予定者を集め、当日を迎える。そして会議終了後には報告書を提出する。

2. 筆者がオーガナイザを務めた会議

筆者はこれまでに以下の5回の湘南会議でオーガナイザに加わっている。

- Big Graph Drawing (2015年1月)
- Immersive Analytics (2016年2月)
- Dynamic Networks Visual Analytics (2016年8月)
- Immersive Analytics for Network and Trail Sets Data Analysis (2018年12月予定)

* <https://www.nii.ac.jp/about/international/shonanmtg/>

† <https://www.dagstuhl.de/>

- The Moving Target of Visualization Software (2019年2月予定)

これらの会議の中でも、最も本格的な成果を出した Immersive Analytics について紹介する。

Immersive Analytics とは、仮想現実・拡張現実空間に情報可視化・インタラクション・協調システムの仕組みを導入することにより、没入型環境にて情報の分析や観察を支援するシステムを構築する研究課題である。この研究課題に関する集大成ともいえるべき1冊の書籍を発刊するために、筆者らは8名のオーガナイザチームを組み、4名で湘南会議に、4名でダグストゥール会議に申請書を提出し、どちらも採択された。そして2016年2月の湘南会議にて Immersive Analytics に関する課題や話題を抽出し、2016年6月のダグストゥール会議にて書籍の構成を議論し、さらに各章に対応するチームを構成し、各チームにて各章の詳しい構成を議論した。それから1年以上にわたって約50名の著者陣により執筆作業と Skype 会議を繰り返し、2018年6月に原稿全体を脱稿した。本書籍は2018年秋に Springer 社から世界各国で発刊される予定である。

2016年2月の湘南会議から2年半もの時間をかけて、ひとつの研究分野を世界各地の約50名の研究者で俯瞰的に議論しあい、章構成の策定から添削・校正にいたるまで共同作業体制に徹して書籍を発刊する、というのは滅多にない体験である。日本に湘南会議がなかったら筆者はオーガナイザチームと呼ばれていなかったかもしれない。湘南会議という素晴らしい場所を企

画してくださった NII には感謝に堪えない。

もっとも、湘南会議は書籍発刊のような本格的な成果をノルマにしているわけではない。筆者の知る限りでも例えば、1本のポジションペーパーを投稿する、国際会議の併設ワークショップを企画する、といったカジュアルな成果も議論されてきた。情報学に関する研究課題の議論の場を日本に持ち込み、国際的なコミュニティを形成して世界に発信すればよい、というのが筆者の解釈である。

3. 湘南会議に参加してみても

湘南会議が開始されたのは2011年、くしくも東日本大震災があった年である。筆者は震災のあと、日本には海外の研究者はしばらく来てくれないのではないかと心配していたものである。ひょっとしたら湘南会議の事務局も当時同様な心配をされていたかもしれない。それが現在では、湘南会議は情報学のさまざまな分野で大変な人気だそうで、採択されてから会議開催までそれなりの期間を要することが多くなっている。また最近では、有力国際会議が日本で開催される機会が増えたこともあって、筆者の周囲では有力国際会議の前週または翌週に湘南会議を実施したいという海外研究者の声もよく聞こえている。

さて、少なくとも筆者の周辺では、湘南国際村センターは海外からの研究者に大変な好評なようである。羽田空港・成田空港からさほど難しくもない経路で到着できるわりには、地理的にほどよく孤立した場所にあつて、議論に集中できる環境が整っている。会議室は常に4室確保されているため、細かいグループに分かれての密接な議論が可能である。センター内にはプールや卓球台があり、また往復5km程度の軽いハイキングコースもあつて、リフレッシュの手段にもことかかない。センター内で提供される食事や、夜の懇親の場となるラウンジスペース、鎌

倉市街地へのエクスカージョンなども、海外からの参加者に大変な好評である。これらの環境は研究者間の交流を深めるには絶好の環境であることは間違いない。

筆者は何度か湘南会議をオーガナイズして、日本が好きで研究者が予想以上にたくさんいることを実感している。このような研究者の方々は、今後も湘南会議の招待に喜んで来日してくれるであろう。日本の情報学の国際体制を強化するためには、この機会を有効活用しない手はないと考える。

なお筆者の周囲に限って言えば、オーストラリアの研究者が湘南会議の開催に非常に精力的である点も特筆に値する。オーストラリアは北米やヨーロッパから非常に遠く、自国で研究集会を開催しても参加者集めに苦労するという話をよく聞く。そこで日本の研究者と協力して、湘南会議によって世界各国の研究者を集めることで、新しい研究分野を主導的にデザインする、という手段が有効になるわけである。

4. オーガナイザに立候補してみよう

筆者はオーガナイザではなく単なる招待者として湘南会議に参加したこともある。もちろんながら研究の議論にオーガナイザもそれ以外の参加者も関係ない。しかしながら、オーガナイザを務めることで得るものは非常に大きい。まず申請書を作成する時点で新しい研究課題について思いを馳せる時間ができるし、会議当日も研究課題を俯瞰しデザインする位置に立つことができる。続いて多数の招待者に連絡をとる時点で多くのインタラクションができるし、会議当日も同様にオーガナイザには参加者との多くのインタラクションが控えている。つまり、人脈形成を目的として湘南会議に参加するのであれば、オーガナイザは非常に得な立場なのである。

筆者の研究室学生の研究課題の中には、筆者がオーガナイザを務めた湘南会議で得た議論が

参考になっている研究課題がいくつかある。また研究室の国際的な活動という意味でも、研究室学生の短期研究留学や国際共同論文などの実現、また筆者自身が国際会議やセミナーの招待講演者として呼ばれるなどの機会につながっている。筆者の経験からいってオーガナイザはとても得るものが大きい立場であると言える。国際色の強い研究生を送りたい研究者にとって、湘南会議のオーガナイザは非常に有益な機会と言える。